

具体のことば vs. 抽象のことば —日本語と英語の基本理解と英語教育—

植野 貴志子¹ 井出 祥子²

¹ 東京都市大学共通教育部 〒158-8586 東京都世田谷区等々力 8-9-18

² 日本女子大学文学部 〒112-8681 東京都文京区目白台 2-8-1

E-mail: ¹ uenokishiko@gmail.com, ² side@lares.dti.ne.jp

あらまし 現行の英語教育において、一人称代名詞“I”，指示詞“this, that, it”，動詞の過去形“verb-ed”は、それぞれ「私」、「これ・あれ・それ」、「た」に対応するものとして導入されている。これらは、英語、日本語において、自己、空間、時間を構成する基本表現であるが、そこには英語と日本の根本的なものの見方の異なりが潜んでいる。“I”，“this, that, it”，“verb-ed”は事象を抽象化、概念化して捉えるものの見方、「私」、「これ・あれ・それ」、「た」は事象を具体的、即事的に捉えるものの見方を備えている。この議論をもって、「日本語は、具体のことば」、「英語は、抽象のことば」というものの見方の違いに基づく英語教育に向けての方略を提案する。

キーワード I, 私, this・that・it, これ・あれ・それ, verb-ed, た, 日英語対照

Abstractness vs. Concreteness: A Study of Fundamental Differences of English and Japanese

Kishiko UENO¹ and Sachiko Ide²

¹ Faculty of Liberal Arts and Sciences, Tokyo City University 8-9-18 Todoroki, Setagaya-ku, Tokyo, 158-8586 Japan

² Faculty of Humanities, Japan Women's University 2-8-1 Mejirodai, Bunkyo-ku, Tokyo, 112-8681 Japan

E-mail: ¹ uenokishiko@gmail.com, ² side@lares.dti.ne.jp

Abstract In current English education, the first-person pronoun “I”, the demonstratives “this/that/it”, and the past tense verb “verb-ed” are introduced as corresponding to “*watashi*”, “*kore/are/sore*”, and “*ta*”, respectively. These are the basic expressions of self, space, and time in both English and Japanese, but there is a fundamental difference in the perspective: “I”, “this/that/it”, and “verb-ed” are outcomes of abstraction of reality, while “*watashi*”, “*kore/are/sore*”, and “*ta*” are outcomes of concrete and immediate perspectives of reality. In English language education, it is necessary to make learners aware of the fundamentals of English and Japanese, namely, the abstractness of English and the concreteness of Japanese, to bridge the differences in the perspective between the two languages.

Keywords I, *watashi*, this/that/it, *kore/are/sore*, verb-ed, *ta*, comparative perspectives of English and Japanese

1. はじめに

異なる言語には異なるものの見方がある（井筒 1991）。言語を獲得する過程で、日本語母語話者は日本語のものの見方を、英語母語話者は英語のものの見方を知らず知らずに身につけている。したがって日本語母語話者が英語を学習するとき、英語のものの見方が日本語のそれとどう違うのかを理解することは重要なことである。

本稿は、そうした見地に立ち、従来の言語研究から得られた英語と日本語のものの見方に関する知見を英

語教育に活かすための議論を行い、英語教育の改善に向けての問題提起を行うことを目的とする。

英語と日本語のものの見方の異なりについては、多くの研究が行われてきた。英語は、「神の目」（金谷 2019）、「鳥の視点」（森田 1998）、「全知視点」（熊倉 1990）、「脱現場化志向」（新村 2022）、「外在的視点」（井出 2020）などと表されるように、俯瞰図、鳥観図を見るようなものの見方、自分に直接関わる事柄や状況を脱現場的、外在的な立場から捉えるものの見方を備えていることが指摘されている。

植野貴志子・井出祥子, “具体のことば vs. 抽象のことば—日本語と英語の基本理解と英語教育—”,
言語学習と教育言語学 2021年度版, pp. 13-20,

日本英語教育学会・日本教育言語学会合同編集委員会編集, 早稲田大学情報教育研究所発行, 2022年3月31日.

Copyright © 2021-22 by Ueno, K., & Ide, S. All rights reserved.

一方日本語は、「虫の目」(金谷 2019)、「蛇の視点」(森田 1998)、「間人的視点」(熊倉 1990)、「現場依存」(新村 2022)、「内在的視点」(井出 2020)などと表されるように、状況に埋め込まれた虫や蛇のように、自分と周りの関係を見るような、現場に内在したものの見方を特徴とすることが指摘されている。

本稿では、これらの先行研究によって様々に言い表されてきた英語と日本語のものの見方の特徴は、「英語は、抽象のことば」、「日本語は、具体的のことば」という各々の言語を貫く基本として捉えることができると考える。なぜなら、英語における俯瞰図を見るような、あるいは、自分に関わる事柄や状況を脱現場的、外在的な立場から捉えるようなものの見方は、目の前の具体的な事象から本質的な要素を抜き出し、抽象化、概念化するはたらきを伴うと考えられるからである。一方、日本語における、状況に埋め込まれた虫のように自分と周りの関係を見るような、現場に内在したものの見方は、個々の事象を直接に知覚され経験される実体として具体的、即事的に捉えるはたらきを含んでいると思われる。

英語と日本語のものの見方の違いは、言語上に目に見えるかたちではっきりと現れるわけではなく、把握されにくいものである。そのため英語教育で明示的に教えられることもほとんどない。しかしながら、英語教育の現場で痛感されるのは、日本語母語話者の英語学習における困難は、日本語と英語に備わるそれぞれに異なったものの見方が適切に把握されていないことによるところが大きいのではないかという問題である。本稿では、この問題を解決するための試みの1つとして、先行研究から得られた知見を英語教育に活かすための議論を展開していく。

2節から4節では、中学1年生向けの英語教科書でアルファベットやあいさつに続いて導入される、自分を指す一人称代名詞“I”，自分の周りの事物を指す指示詞“this, that, it”，さらに中学1年生の最後に導入される動詞の過去形“verb-ed”，および、それらに対応して示されている日本語の表現（「私」、「これ・あれ・それ」、「た」）を取り上げる。これらは、英語、日本語において、自己、空間、時間を構成するための基本表現であるが、ここにこそ英語と日本語の根本的なものの見方の違いが顕著に表れると予測される。5節では、2節から4節の議論に基づき、英語教育において日本語と英語のものの見方の違いをいかに教えることができるかを探る。

2. “I” と「私」

“I”は「私」に対応するという点について疑問が投げかけられることはほとんどない。中学1年生の文科

省検定英語教科書 *Sunshine 1* (開隆堂, 2017年), *New Crown 1* (三省堂, 2017年), *New Horizon 1* (東京書籍, 2017年) では、一人称代名詞主格の“I”は be 動詞の一人称単数活用形“am”を伴って“I am”のかたちで導入され、「私は～です」に相当すると説明されている¹。

- *Sunshine 1* (p. 24)
 - Hi, I am Yuki.
 - Oh, you are Yuki. I'm Mike.「私は～です」は<I am ~.> で、
「あなたは～です」は<You are ~.>で表します。

- *New Crown 1* (pp. 20-22)
 - I am Tanaka Kumi. 「私は～です」
 - You are Ken. 「あなたは～です」

- *New Horizon 1* (pp. 23-25)
 - I am Ellen Baker.
 - You are Ando Saki.

I は「わたしは」、am は「です」に当たる。
you は「あなたは」、are は「です」に当たる。

上の説明に従えば、中学1年生は、“I”を「私(は)」と同等のものとして理解するだろう。外国語を学ぶとき、母語の相当表現を当てはめるのはやむを得ないことではあるが、“I”と「私(は)」のあいだには根本的な違いがある。このことを見過ごしているのが、日本の英語教育の実情である。

Benveniste (1971) は、“I”について次のように述べている。

- (a) “I”は、いかなる個人にも関わることがないという意味において、「虚の記号 (empty sign)」（Benveniste 1971: 219）である。
- (b) “I”は、言語のうちにあつて、みずからを除く他の全ての記号の境域を超えたところに位置を占める (Benveniste 1971: 218)。

(a)にあるように、“I”がいかなる個人にも関わることがない虚の記号であるということは、つまり、だれであつても、どんな状況でも、自分を指して“I”と言う者

¹ 三上 (1972)、山口 (2004) らが説くように、「は」は1つの事物を選び出し、指し示すはたらきをするものであり、たとえば「夜は鍵をかける」のように、西欧語の主語・述語のような関係を成り立たせるものではない。学校文法では、日本語の文は主語と述語からなり、主語は「～は、が、も」で示すとしているが、これは日本語に英語文法をこじつけた無理な説明であると思われる。“I am ~”を「私は～です」、 “I”を「私は」、 “am”を「です」に対応させることにも無理がある。これについては稿を改めて考えたい。

が“I”になるということである。したがって、“I”とは、“I”と言う話者その人を指すという極めて抽象的、概念的な性格をもった語であると言える。

さらに言えば、自分を指して“I”と言う話者が話しかける相手はその都度“you”になる。したがって、“you”も、“I”と同様に、いかなる個人にも関わることがない抽象的な虚の記号である。“I”と“you”は、ともに抽象的であるがゆえに、話者“I”によって“you”と指された者が、次に自分を指して“I”と言えば、それ以前に自分を指して“I”と言っていた者が今度は“you”と呼ばれる立場になるように、“I”と“you”は互いに反転可能

(reversible)である (Benveniste 1971: 225)。

いかなる個人にも関わることがない抽象的、概念的な虚の記号である“I”は、(b)に示されるように、他の全ての語の境域を超えたところに位置している。他の全ての語を超越して位置する“I”を用いることで、話者は言語全体を支配する基点となり、“I”の周りに時間・空間の概念を構成する (Benveniste 1971: 226)。

Benveniste が述べる“I”の本質は、「神の目」、「鳥の視点」、「全知視点」、「脱現場化」、「外在的視点」などと表される英語のものの見方そのものを表していると思われる。だれであっても、どんな場合でも、話者その人を指すという抽象的、概念的な語である“I”によって、話者は、俯瞰図を見るような、あるいは、脱現場化して、外在的な視点から事象を捉えるようなものの見方をすることが可能になる。

一方、日本語には、「わたし」、「わたくし」、「ぼく」、「おれ」等々、自分を指す多数の自称詞²があるが、それらは“I”のような抽象的、概念的な虚の記号ではない。日本語の自称詞はそれぞれに特定の意味、社会指標性を持ち、それゆえに、英語の“I”のように、だれであっても、どんな状況でも使えるものではない。

たとえば「わたくし」は、「公に対し、自分一身に関する事柄」(広辞苑第7版)という意味をもつ名詞であると同時に、目上の人に対して、改まった場面で使用されることが多い自称詞である。また「ぼく」は、もともと「しもべ」の意味をもつ名詞であるが、現代では主に男性が同等以下の相手に対して用いる自称詞である。「わたくし」が改まった丁寧さ、「ぼく」が男性性や、ややくだけた雰囲気指標するというように、日本語の自称詞はそれぞれに異なる社会指標性を有している。

鈴木 (1973) は、ある小学校男性教師 (40 歳) を対

² 鈴木 (1973) は、日本語の自分、相手を指すことばを総称する用語として自称詞、対称詞を用いた。一人称代名詞、二人称代名詞ではなく、自称詞、対称詞を用いるのは、日本語で自分、相手を指して用いられることばには、「わたし」、「ぼく」、「あなた」、「きみ」等のほか、親族名称や役割などの多様な表現が含まれるからである。

象として、他者との関係に応じて自分をどう指すかを調べた。その男性は自分のことを、父親に対しては「ぼく」、妻に対しては「おれ」、息子に対しては「お父さん」と言う。職場に行って校長と面すれば、自分のことを「私」、生徒と面すれば「先生」と言う。自称詞の選択が具体的な人間関係や場面によって変わるように、相手を指す対称詞も具体的な人間関係や場面によって変化する。男性は、目上を指して言うときは相手の役割や肩書 (お父さん、校長先生) を使い、同等・目下を指して言うときは相手の名前や「きみ」、「おまえ」を使う。

このように自称詞と対称詞は、上下を基軸とした具体的な人間関係や場面によって選択されるのであり、抽象的な性質をもつ“I”と“you”とは異なり、反転可能ではない。

日本語には、だれであっても、どんな状況でも、自分を指して使うことができる“I”と厳密な意味で同等の語はない。日本語の自称詞は、現場における内在的視点で、人と人のあいだの「間人的視点」をもって、具体的、即事的な関係や場面に応じたものの見方によって選択される。

自分を指し示すのに抽象的、概念的なものの見方をする英語、一方、自分と相手の具体的、即事的な関係に応じたものの見方をする日本語、この違いは、自分を中心とした空間、時間の構成のしかたにも関わってくるだろう。3 節、4 節では、英語、日本語において空間、時間がどう構成されるかを、“this, that, it”と「これ・あれ・それ」、動詞の過去形“verb-ed”と「た」を対照しながら考える。

3. “this, that, it” と「これ・あれ・それ」

指示詞“this, that, it”は、*Sunshine 1, New Crown 1* で下のように入導入されている。*New Horizon 1* でもほぼ同様の説明がなされている。

- *Sunshine 1* (p.50)

- This is my bag. Is that your bag?

- Yes, it is. / No, it isn't.

「これは～です」は<This is ~.> で表します。This は近くのもの、that は遠くのをさします。前にでたものをさして言うときは it を使います。

- *New Crown 1* (p.28)

- This is a fox. 「これは～です」

- Is that hawk? 「あれは～ですか」

- Yes, it is. / No, it is not.

(it については、付録中(p.155)、「それは、それが」と説明されている。)

この説明に従えば、“this”は「これ(は)」、「that」は「あれ(は)」、「it」は「それ(は)」に相当すると理解されるだろう。ここで取り上げるのは、“this”と「これ」、「that」と「あれ」、「it」と「それ」が同じなのかという問題である。

「近称・中称・遠称」である「これ・それ・あれ」は、それぞれ「自分の近く・相手の近く・自分と相手の遠く」の対象を区別して指す。たとえば、部屋の中で母親が子供に箱をとってくるよう依頼する場面(井出 2022)を想像してみよう。下のやりとりにおいて、母は自分からも子からも遠い箱を「あれ」と指している。次に子が箱を手を持って「これ」と言えば、母は子が手にした箱を「それ」と指している。

母：箱，とってきてちょうだい。

子：どこにあるの？

母：あれよ，ママが指しているところにあるでしょ。

子：(箱を手を持って) あっ，これ？

母：ええ，それ，それ。

(井出 2022: 44)

上の例が示すように、「これ・それ・あれ」は、話者と対象，および、話者と相手との具体的，即事的な距離や位置関係に応じて使い分けられる。

一方“this”，“that”は、従来、話者から対象までの遠近(Levinson 1983 他)を表すと言われてきたが、近年のコーパスを用いた研究から，“this，that，it”の3つの指示詞は、話者の対象に対する注目度(focus) — “this”は high focus，“that”は medium focus，“it”は low focus — に応じて使い分けられることが明らかにされている(Strauss 1993, Strauss et al. 2018, 新村 2022)。

Strauss et al. (2018: 123) は、high focus, medium focus, low focus の違いを端的に表すものとして下の例を挙げている。

Peace. This is our greatest hope. (high focus)

Peace. That is our greatest hope. (medium focus)

Peace. It is our greatest hope. (low focus)

ここでの“this”，“that”，“it” は、いずれも直前の“peace”を指しているが、話者の“peace”への注目度は、“this”が最も高く，“that”，“it”の順に低くなる。日本語で同様の表現「平和。〇〇は我々の最大の希望である」を仮定してみると、〇〇の位置に近称「これ」、中称「それ」を使うことはあっても、遠称の「あれ」を使うことはない。このことから英語と日本語の指示詞が一樣ではないことが窺える。Strauss et al. (2018) に示された例とは別に、空間的文脈において使用される“this”，

“that”，“it”にはどのようなものの見方が潜んでいるのだろうか。

新村(2022)は、漫画のせりふをデータとして“this，that，it”と「これ・あれ・それ」の選択におけるもの見方を分析している。以下、新村(2022)から2つの事例分析を紹介する。1つ目は米国の漫画 Betty の1コマである。

事例 1



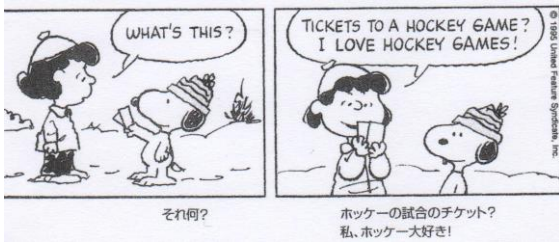
吹き出しには、読み終えた本を顔の前に持って寝転がる Betty が発した3つの発話がかかれている。3つの発話中、手元の本を指す指示詞が“that”，“it”，“this”と変化している。

- (1) **That** was a wonderful book!
- (2) Once I started **it**, I couldn't put **it** down!
- (3) I definitely will want to read **this** one again!

Betty が(1)“**That** was a wonderful book!”と、medium focus の“that”を使って顔の前に持った本を指しているのは、読み終えた本が過去のものになったからである。日本語では、自分が手にした眼前の対象を「あれ」と指すことはない。「これ面白かった!」と言うだろう。次に、(2)“Once I started **it**, I couldn't put **it** down!”で“it”が使われているのは、対象(本)が既に談話に導入され、Bettyの本に対する注目が低く(low focus)なったためである。さらに、(3)“I definitely will want to read **this** one again!”において“this”が選ばれたのは、Bettyの本に対する「また読みたい」という強い興味、他の本ではなく「この本」という強調(high focus)によるものと考えられる。ここでの“this”は、必ずしも本が具体的、即事的に近い距離にあることによるわけではない。

次の事例は、米国の漫画 Snoopy と、谷川俊太郎による日本語訳である。

事例 2



英語の原作では、スヌーピーが手にしているものを指して、ルーシーが“*What’s this?*”と尋ねている。High focus の“*this*”が使われたのは、ルーシーの対象に対する強い興味によるものと思われる。一方、日本語訳では「それ何?」となっている。ルーシーが指し示すものが、自分ではなく相手（スヌーピー）に近いところにあるからである。

新村他 (2012) では、漫画 Snoopy (事例 2) の“*What’s this?*”の“*this*”を隠し、英語母語話者 55 名を対象として、隠した箇所にとどの指示詞を入れるかアンケートをとっている。アンケートの結果、55 名の 64% が原作とは異なる“*that*”, 36% が原作と同じ“*this*”を選んだという。“*this*”か“*that*”かで答えが割れるのは、“*this*”, “*that*”が話者から対象への具体的、即事的な距離ではなく、話者の対象への注目度という抽象的、概念的な尺度によって選択されるためである。一方、日本語話者 55 名を対象にルーシーの発話「それ何?」の「それ」の箇所を隠して同様の調査を行ったところ、ほぼ全員 (94%) が「それ」を選んだという。日本語では自分と相手を含んだ具体的、即事的な距離や位置によって指示詞が選択されるためである。

事例 1, 2 の漫画に描かれているのは、日常的な場面におけるシンプルな発話である。しかし、そこで使われている指示詞の意味は、*this*=これ、*that*=あれ、*it*=それ、と一対一で対応させて覚えていただけでは、正確に理解することはできない。

筆者は、留学経験のある学生から「ある朝、変わったデザインの服を着て部屋を出たところ、ホスト・ファミリーのお母さんに、“*What’s that?*”と言われた。なぜお母さんが目の前の服に対して“*that*”と言ったのか不思議に思った」という話を聞いたことがある。その学生がお母さんの“*What’s that?*”を不思議に思ったのは、“*that*”とは、話者から遠くのものに「あれ」と指す語であると覚えていたからである。学校では“*this*”, “*that*”は物理的な遠近に応じて使用すると教育してきたが、実際には、Strauss (1993), 新村 (2022) らが指摘したように、“*this*”, “*that*”は話者から対象への注目や興味の度合いといった抽象的、概念的な尺度に応じて使用される。この考えに基づけば、お母さんの

“*What’s that?*”にも説明がつく。つまり、お母さんは学生のいつもとは違う服に対して訝しい気持ちを抱き、“*that*”を選んだのである。学生がこのことを知っていたら、お母さんの発話の意味をより正確に捉えることができただろう。

以上の議論から考えられることは、自分の周りの空間を構成する指示詞「これ・あれ・それ」は、「私」、「ぼく」などの自称詞と同様に、現場において自分の周囲を見る「虫の目」、「蛇の視点」、あるいは「間人的視点」から、自分と対象、あるいは、自分と相手、対象の具体的、即事的な距離や位置関係に基づいて使用される傾向にあるということである。一方、他の全ての語の境域を超えたところに位置する抽象的、概念的な虚の記号である“*I*”を基点として空間を構成する“*this*, *that*, *it*”の使用には、話者の注目や興味の度合いなど概念的、抽象的な尺度が大きく関わってくる。日本語と英語において、指示詞を使用する際のもの見方は同じではないのである。

4. “*Verb-ed*”と「た」

中学 1 年生の最後に学ぶ文法項目は、動詞の過去形である。Sunshine 1 において、動詞の過去形は日本語の「～た」に対応するものとして説明されている。New Crown 1, New Horizon 1 も同様である。

● Sunshine 1 (p. 100)

「～しました。」と過去のことを言うときは、動詞のうしろに-(e)d を付けます。

ここで問うのは、動詞の過去形は、日本語の「た」と対応させるだけで適切に理解されうるのかという問題である。

Comrie(1985)は、時間、時制、過去形について、図 1 を用いて次のように説明している。

- (a) 時間は左から右に進む 1 本の直線に表される。A は B の前に起こり、C は B の後に起こる。
- (b) 動詞の過去形は、事態を現時点の「0」より左側に位置付けるものである。
- (c) 過去形はその事態が現時点まで続いていないことを含意する。

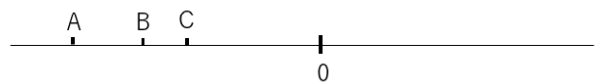


図 1. 現時点「0」を基準とした時間軸上の過去の事態 (Comrie (1985: 6)をもとに再構成)

(a)には、時間というものに対する英語母語話者の認

識が表われている。英語母語話者にとって時間は左から右に進む1本の直線に擬えられるものであり、個々の事態はその直線上に並べられる。そして、(b), (c)にあるように、動詞の過去形は、直線上の「0」より左側に事態を位置付け、その事態を現時点との関連を問わない「過去」として表す機能をもつ。

(a), (b), (c)に示されるのは、英語には、1本の時間軸を仮定して、その時間軸上に事態を配列し、それぞれの事態が起きた時点や、事態と事態の時間軸上の関係を捉えるものの見方があるということである。さらに、事態の時間軸上の配置を区別し、表示するのが、動詞の時制であり、動詞の過去形は発話時点から切り離された過ぎた事態を指すものであるということである。仮定された時間軸は、抽象的、概念的なものである。そして、時間軸上に配置された事態と事態の関係を見渡すことができるのは、全知的な「神の目」である。

日本語では、はたして1本の時間軸を仮定し、その上に事態を配置するようなものの見方をするのだろうか。「た」については、研究者のあいだでも *Sunshine 1* の説明と同様に、英語の動詞の過去形と対応させて解釈する考えが大勢を占めている（例えば、寺村 1984, 益岡・田窪 1992）。

一方で、「た」は、本来、英語のように過去を過去として指示する機能をもつものではないという指摘もなされている。山口（1989：17）によれば、「た」は、過去・現在・未来のどの文脈（「去年、富士山に登った」、「壁にかけた絵」、「今度、彼に会ったら」）にも使われる。したがって、「た」は、過去・現在・未来のどれかの概念で律することができる語ではない。山口は、「た」は、時間の意味に関わるものではなく、「ある時点でそのことを確認した」という意味とするのが最も適切であると結論付けている。

熊倉（1990, 2011）は、「た」は、完了の助動詞「つ」の連用形に、存在詞「あり」がついた形と分析されることから、その意味は、「完了した動作・作用（つ）の主体が存在する（あり）」であると説明する。「た」は過去そのものを意味するのではなく、「行った、見た」などの行動をとった自分が、そう発話した瞬間に現前しているということを示すのである。つまり、「行った、見た」自分が、「イマ（自分の頭に蘇って）ある」のであり、それは、仮定された時間軸の「過去」に配置される“went, saw”とは性質が異なる（熊倉 2011：131）。熊倉は、日本語には英語のような「マッピングが可能」な言語空間はなく、ゆえに時制もないと断じている。

山口（1989）、熊倉（1990, 2011）に共通するのは、「た」はあくまでも、話者の具体的、即事的なイマ・ココの認識を表すものであり、ある事態を抽象的、概

念的な時間軸上の現時点と切り離された時点に「過去」として配置するものではない、ということである。

そのように考えれば、下のようなイマ・ココの事態に「た」が使われるのも納得できる。

バスが来た！（Here comes the bus!）

勝った！勝った！（We win!）

また、下の一節に見られるように、「た」が、存在の「る」（熊倉 2011）と混じって使われることも自然である。

目を覚ますと、一番先に台所へゆき冷蔵庫から卵を出す。これが左知子の習慣だった。卵は二個である。（略）冷蔵庫から室温にもどしてからのほうが、オムレツでもふんわり焼けると聞いてからこうしている。氷のように冷たい卵は固くて重たいような気がする。白い皿の上で、にぶい音を立ててぶつかり合い揺れていたが、すぐ静かになった。

（向田邦子「嘘つき卵」『小説新潮』1981/10、熊倉千之氏提供）

上に論じてきたように、動詞の過去形“verb-ed”は「た」と同じではない。英語には抽象的な時間軸に配置された事態の位置関係を高みから見渡す全知視点があり、過去形は、その時間軸上で、現時点から切り離された「過去」を指し示す。一方日本語には、日本語には、抽象的、概念的な時間軸は仮定されておらず、また、それを見渡すような抽象的、概念的な全知視点も備わっていない。状況に埋め込まれた「虫の目」、「蛇の視点」のように現場に内在し、直接に知覚され経験される事象を具体的、即事的に捉えるものの見方を特徴とする日本語において、「た」は、話者が現前の事態を確認したり、過ぎた事態をイマ・ココに想起し認識したことを表出するという、具体的、即事的な性格をもっているのである。

5. 日本語と英語のものの見方の違いに基づいた英語教育への方略

“I”, “this, that, it”, 動詞の過去形“verb-ed”には、事象を抽象的、概念的に捉えるものの見方、「私」、「これ・あれ・それ」、「た」には事象を具体的、即事的に捉えるものの見方がある。「英語は、抽象のことば」、「日本語は、具体のことば」—これは、日本語と英語に一貫して見られる特徴であると言える。

現行の英語教育において、“I”, “this, that, it”, 動詞の過去形“verb-ed”は、それぞれ、「私」、「これ・あれ・それ」、「た」に対応するものとして導入されている。

これらは、英語、日本語において自己、空間、時間を構成するための基本表現であるが、この基本表現にこそ、英語と日本語の根本的なものの見方の違いが潜んでいる。それにもかかわらず、日本の英語教育では、どの段階においても、日本語のものの見方が、英語のものの見方とどのように違うのかということには全く触れていない。

このような教育を受けてきた高校生、大学・大学院生に対して、筆者は、「I」、「this, that, it」、「verb-ed」が「私」、「これ・あれ・それ」、「た」とどう違うのか、なぜ日本語話者にとって英語が難しいのか、といったテーマを取り上げ、「日本語は、具体的ことば」、「英語は、抽象のことば」という基本と日本語と英語のものの見方の異なりを認識させる試みを行っている。学生の感想の一部を紹介する。

(高校生)

- 学校では習わなかったこと、英語と日本語の違いを理論的に説明してくださったので、英語のルールが日本語の文法と比較できて、とてもすんなり理解できた。
- もともと英語が好きなので、日本語と英語の根本的な違いを知ることができて興味を持った。将来かならず英語を話せるようにしたいので、今回学んだことをいかして習得していきたい。“this, that, it”の使い方が一番興味深かった。
- 英語のテストで日本語を英語にしなさいとか、その逆パターンの問題とかがあるが、英語と日本語の大きな違いがあるとすると、実はすごく難しい問題になってしまうと思った。なぜ英語を勉強するときに日本語との大きな違いを教えてくれないのか。

(大学院生)

- 今回のようにはっきり整理されて、教えていただいたのは、はじめてです。文法にしても、こういうものだからと教えられ、自分の頭で納得がいかないまま終わってしまうことが多かった気がします。特に、時制はすっかりわからないまま終わってしまった記憶があります。(略)英文を見るだけで、「無理！」という拒否反応があったのですが、わかりやすく体系立てて教えていただいたことで、英文を読んでみようという気になっています。というわけで、いま、ラダーシリーズの「I am a cat. (吾輩は猫である)」を読み始めていますが、吾輩＝Iなのですね。「吾輩」というだけで物語のスタンスや背景がわかる具象的表現の日本語との違いに驚いています。あ、こういうことか！と思いました。

下線箇所から、日本語と英語のものの見方の違いを学校で学んでこなかった学生が、それを知ることによって英語の理解が促されることを自覚した様子が窺える。上記のほかにも、日本語と英語の違いを認識することで英語学習へのモチベーションを新たにしたり、といった感想が寄せられている。

英語教育を改善するための方略として次のことが考えられる。第一に、文部科学省の学習指導要領に本稿で述べてきたこと、すなわち日本語と英語のものの見方の違いに関する項目を取り入れる。第二に、その学習指導要領に基づいて検定教科書を作成する。第三に、その検定教科書を教育現場で使って、日本語と英語のものの見方の違いに関する項目を教える。

日本人が英語を学ぶことの意義の1つは、日本語母語話者のアイデンティティを保ちながら、英語を使うことができるグローバル人を育成することである。そのためには、本稿で議論した日本語と英語のものの見方の違いに基づいた英語教育を導入することが急務である。

謝辞

本稿に対して貴重なコメントをくださった編集委員とお二人の査読者に謝意を表したい。なお、本研究はJSPS 科研費 17K02746 (「日本人の英語発話モデルの構築—話ことばの日英対照研究を基に一」)の補助を受けている。

文 献

- [1] Benveniste, E., The nature of pronouns, in Problems in General Linguistics, pp. 217-222, University of Miami Press, 1971. (Émile Benveniste, Problemes de linguistique generale, 1966)
- [2] Benveniste, E., Subjectivity in language, in Problems in General Linguistics, pp. 223-230, University of Miami Press, 1971. (Émile Benveniste, Problemes de linguistique generale, 1966)
- [3] Comrie, B., Tense, Cambridge University Press, New York, 1985.
- [4] 井出祥子, “場の語用論—西欧モデルを補完するパラダイム—”, 井出祥子・藤井洋子編, 場とことばの諸相, pp. 1-37, ひつじ書房, 東京, 2020.
- [5] 井出祥子, “場の言語学・語用論とその展開—言語と文化の関わりのメカニズムを求めて—”, 岡智之・井出祥子・大塚正之・櫻井千佳子編, 場と言語・コミュニケーション, pp. 31-60, ひつじ書房, 東京, 2022.
- [6] 井筒俊彦, 意識と本質, 岩波書店, 東京, 1991.
- [7] 金谷武洋, 日本語と西欧語—主語の由来を探る, 講談社, 東京, 2019.
- [8] 熊倉千之, 日本人の表現力と個性, 中央公論社, 東京, 1990.
- [9] 熊倉千之, 日本語の深層〈話者のイマ・ココ〉を生きることば, 筑摩書房, 東京, 2011.
- [10] Levinson, S.C., Pragmatics, Cambridge University

Press, New York, 1983.

- [11] 益岡隆志・田窪行則, 基礎日本語文法—改訂版—, くろしお出版, 東京, 1992.
- [12] 三上章, 現代語法序説, くろしお出版, 東京, 1972.
- [13] 森田良行, 日本人の発想, 日本語の表現, 中央公論新社, 東京, 1998.
- [14] 新村朋美, “直示表現に見る「日本語の場」と「英語の場」の違い”, 岡智之・井出祥子・大塚正之・櫻井千佳子編, 場と言語・コミュニケーション, pp. 123-146, ひつじ書房, 東京, 2022.
- [15] 新村朋美・単娜・鄭若曦・ハヤシブレンダ, “日本語・中国語・英語の指示語表現にみるダイクシス構造の違い”, 日本認知言語学会論文集, 12, pp. 349-361. 2012.
- [16] Strauss, S., A Discourse Analysis of ‘This’, ‘That’ and ‘It’ (And Their Plural Forms) in Spontaneous Spoken English. M.A. Thesis, UCLA, 1993.
- [17] Strauss, S., P. Feiz, and X. Xiang. Grammar, Meaning and Concepts: A Discourse-Based Approach to English Grammar. Routledge, New York, 2018.
- [18] 鈴木孝夫, ことばと文化, 岩波書店, 東京, 1973.
- [19] 寺村秀夫 日本語のシンタクスと意味, 第Ⅱ巻, くろしお出版, 東京, 1984.
- [20] 植野貴志子, “日本語と英語における自己の言語化—「場所」に基づく—考察—” 岡智之・井出祥子・大塚正之・櫻井千佳子編, 場と言語・コミュニケーション, pp. 97-122, ひつじ書房, 東京, 2022.
- [21] 植野貴志子・井出祥子, “I”と“You”が, なぜ言えないのか?—日英語の根源的異なりの一考察, 言語学習と教育言語学: 2019 年度版, pp. 1-7.
- [22] 植野貴志子・井出祥子, 現場のことば vs. 脱現場のことば—日本語と英語の基本理解と英語教育—, 日本英語教育学会・日本教育言語学会第 51 回年次研究集会, 2021.
- [23] 山口明穂, 国語の論理, 東京大学出版会, 東京, 1989.
- [24] 山口明穂, 日本語の論理—言葉に現れる思想, 大修館書店, 東京, 2004.